

1 今年（H28）の傾向

総評・講評（大問毎に）

例年同様大問3問構成であった。

第1問は水・メタンハイドレートを題材とした理論分野の総合問題であった。出題分野は気体・溶液・溶解度積・反応熱と多岐にわたるが、いずれも標準的かつ典型的な問題であり、条件から思考させていくタイプの問題は出題されなかったため、例年よりはやや平易であると思われる。問3(1)で溶かした塩だけでなく、生じたイオンの組み合わせで生じる他の塩も考慮に入れることができたかで差が出たと思われる。

第2問は金属を題材とした無機化学の知識問題。例年見られる結晶等を題材とした理論分野との融合問題が出題されず、明確に易化している。問8の30字以内の説明記述問題のみやや難しい問題であるが、他はいずれも教科書レベルの基本的な知識・反応式の問題であり、医学部・一般理系を問わず高得点が求められる。

第3問はエステルを題材として有機化学構造決定問題。加水分解生成物の構造を考えさせていくという流れは例年同様である。前半は非常に基本的な知識を問う問題であり必ず得点しておきたい。問5の銀鏡反応の反応式は、生成物がカルボン酸イオンであることに注意したい。問7以降の構造決定は、C19と大きな分子であること、後期で出題されてはいたが、メタセシス反応が出てくること、さらに与えられている情報量が必要最低限に近いことを考えると、明らかに受験生にとっては難しく感じられる問題であったと思われる。

全体としては第3問後半が難しかったものの、第1問・第2問が得点しやすい問題構成だったため、合格ラインは例年と同様になると思われる。標準的な問題を取りこぼしているようでは厳しいだろう。

2 合否ライン（予想）※他の教科が合格ラインをとったときの得点（%）予想

【文系】

文学部	%
教育学部	%
法学部	%
経済学部	%

【理系】

理学部	60%	歯学部	60%
工学部	60%	薬学部	60%
医学部	80%	農学部	60%
保健／看護	60%		
〃 検査	60%		
〃 放射線	60%		

3 来年受験する生徒へのアドバイス

今年度は第1問・第2問が例年より平易であったが、来年度も同様であるとは考えにくい。理論分野では、条件を読ませた上で考察を求める問題が例年出題されているため、公式どおりに解くだけではなく、なぜこれで解けるのかという理論の根本的な部分を理解していく努力をしてほしい。また、今年は出題がなかったが、反応速度・平衡分野の出題も多いため、しっかり演習を積んでおきたい。無機分野も金属や結晶などを題材とした理論分野との融合問題の出題が毎年見られるため、今年出なかったからと気を抜かないように。第3問の有機化学の構造決定は2年続けて難問に区分される問題が続いている。いずれの問題も問題文を精読し構造式の条件を正確に把握することを求めており、演習量の差が得点差として明確に現れやすい。来年度以降も難問が続くかは不明だが、高度な構造決定の問題も含めて演習量をこなしていく必要があるだろう。また、今年のメタセシス反応のように教科書にない反応を題材にすることが多いが、問題を読み込めば理解できるよう説明がついているため、慌てないようにしてほしい。